

# つながる

## CONTENTS

Management & Design 02

「バレーボール」<「大学」<「地域」  
小さな集団から大きな感動を与えられるために

「情報発信基地」

藤田 幸光 本学女子バレーボール部監督

Interface 実践の知 第2回-I

地域貢献への第一歩として

救急救命研究会「TURF」の活動

夏目 美樹 本学現代ビジネス学部助教

Interface 実践の知 第2回-II

寺院とコミュニティとの“つながり”を考える  
地域密着型アートイベント「おてらハプン!」を通して

郷原 彩子 本学大学院文化政策学研究科博士前期課程2回生

京都モダニズム建築を訪ねて 第12回

比叡山回転展望閣

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

現代ビジネスフォーラム報告

企業の社会的責任の理論と実践

阪本 崇 本学現代ビジネス学部准教授

Interview ともに 第2回

このまちが好き! その思いを育てるために

「町たんけん」から「山科かるた」へ、地域の宝物を見つける旅

朱 まり子 NPO法人山科醍醐こどものひろば 町たんけんチーム  
山科かるたプロジェクト代表



# Management

## 「バレーボール」<「大学」<「地域」

小さな集団から大きな感動を与えられるために

## 「情報発信基地」

藤田 幸光 Fujita, Yukimitsu

本学女子バレーボール部監督

京都橘大学女子バレーボールは地域社会に対しての「情報発信基地」の役割を目指して日々取り組んでいる。高校までにたくさんの基礎基本を学んできた学生。女子バレーボール部の学生は特に「スポーツ」を通して「最後まであきらめない精神」以外にも「スポーツマンらしく」ということをプラスして教えられてきた。

「健康」「元気な挨拶」「笑顔」「感謝」「気配り」などそれらを実行していくことが女子バレーボール部の学生にとっての大学および社会の中の位置づけではないかと考える。

私は監督として、ナショナル（現パナソニック）男子チームを長年教えてきたが、大学でも男子チーム（京都大学）を教えたことがある。素人集団の京都大学男子バレーボールチームを2部にまで引き上げた経験もある。だが、大学女子チームを教えたことはなかった。まして、2部で活躍してはいるが選手が9名しかいないチーム、なかなか1部へ上がれないチームの監督をしてほしいと言われたとき、正直躊躇した。だが、これも新たな経験だと思い、京都橘大学女子バレーボール部監督を引き受けた。

この9人の女子バレーボールチームには高校時代に活躍した選手もいて、基本を教え込み、1年で何とか1部昇格を果たした。それから選手が16名に増えた2009年、12月に行なわれた全日本インカレで平均身長わずか167cmのチームがベスト4まで勝ち進んだ。ボールを落とさなければ、バレーボールは勝てる、というレシーブの基本を教え込んだ結果が出たのかもしれない。中学、高校の多くの監督からは女子バレーボールは小さい選手だけでも強くなれる、という希望を与えてく

れた、と激励の電話をいただいた。

学生スポーツはただ単なるスキルレベルの高い選手を集めれば勝てるわけではない。アタック、レシーブ、ブロック、サーブすべてができるオールラウンドプレーヤーがいるわけでもない。サーブだけ、レシーブだけ、ブロックだけが得意な選手もいる。そういう素人の選手たちには、プロスポーツと異なり、勝利至上主義ではなく勝つためのプロセスが重要となる。4年間で肉体的、精神的にも強くなって卒業していくために重要なことは「取り組む姿勢」と「考え方」である。そしてそれをベースに大学生としての自主性と計画性をもって日々努力を継続させることである。

バレーボールを通じて、目標を立て、達成したときの喜びを1人でも多くの人に還元し、また応援をいただいている教職員、地域の人々への感謝の気持ちをもって「運動の楽しさ」「健康の重要性」を伝えることができると考える。「大学敷地内のウォーキングにおいてメタボリックを予防する」「体育館でのストレッチセミナーを受ける」「トレーニングルームでのダイエットセミナーを受ける」といった女子バレーボール部の学生が日々行なっていることを一般学生や教職員に伝える機会が増えれば選手たち自身がお互いに成長でき、いつでも準備をしなくてはならないという自己管理ができるはずである。

「バレーボールを通じ教わってきたこと」を学生主体で運営し、子どもから高齢者まで幅広い年代にわたり、すべての人に幸せと勇気を与えることができれば、よりよい地域コミュニティの活性化になると思われる。京都橘大学の女子バレーボール部の選手であることに誇りを

# & Design 02



藤田 幸光

1960年4月23日生まれ。

長浜商工高等学校を卒業後、松下電器（現パナソニック）監督、  
全日本男子コーチ、全日本ジュニア女子コーチ、  
京都大学男子バレーボール部外部コーチを歴任。  
2007年より京都橘大学女子バレーボール部監督に就任。

もち、地域の小学生、中学生、高校生のバレー選手、さらにはママさんバレーのお母さんたちに技術だけでなく、バレーボールの楽しさを教えることもできるはずである。監督から言われたことだけを必死でやるスポーツでは、心の底から喜びを見出すことはできない。40歳になっても、60歳になっても一生バレーボール大好き人間にならない限り、sportsの本来の意味、「気晴らし」は体得できない。

もちろん、そのために「負ける」だけでなく、「勝つ」ということを経験することが重要な要素であると考えている。人生の中では「負ける」ことのほうが多い。しかし、「勝つ」ことを経験した人間は、勝った喜びだけでなく、負けた相手への思いやりが見えてくる。この敗者への思いやりこそ、心のゆとりであり、長い人生の中で必ず必要になってくる人間としての品性である。京都橘大学女子バレーボールの選手たちは現在の4回生が2度も全国インカレベスト4を経験できた。このベスト4から3



集合写真

位、2位、優勝を経験することなしに勝者のゆとりは生まれない。京都橘高校でも、サッカー部が専用グラウンドもないのに、全国準優勝した。インターハイでも女子バレーボールがあと1点取りさえすればベスト4になった。日本中の人たちが、京都橘高校、大学のスポーツに注目してくれている。

わずかに9名から始まった小さな集団の初々しい、がむしゃらにボールを追いかける選手たちの伝統が、今年も生かされて、これまで経験したことのない、関西1部リーグ優勝、さらに、全国インカレ入賞を目標に、日々楽しく自主的に練習をしていきたい。昨年完成した中央体育館は、バレーボール関係者からも広さ、明るさ、すべての点で評価が高く、選手たちも、毎日練習できる喜びをかみしめて、女子バレーボール部のモットー「夢心 = High dream deep in the heart's core — practice, progress, the moment, the team —」を実現していてももらいたい。今年も、中央体育館からすばらしい「発信」ができ、全国のスポーツファンとつながっていることを心から願っている。



ミーティング風景

## 地域貢献への第一歩として

### 救急救命研究会—TURF—の活動

夏目 美樹 Natsume, Yoshiki

本学現代ビジネス学部助教

本学に関西初の大学における救急救命士養成コースが設置され満5年を過ぎたところである。

救急救命コース開設の年に救急救命士という仕事がどのようなものなのか、どのような方法によって病気や怪我により生命危機にある傷病者の方々の命を助けることができるか、または事故を未然に防ぐことができるかを大学の講義ではなく学生が主体的に学修することを目的に救急救命研究会—TURF—を立ち上げた。その後程なく自然発生的に学生の中から病院前救護に関する医療を学ぶ学生が大学で得た知識・技術を大学近隣地域の方々へ何か還元できないかを考えた活動をはじめた。

当初は活動の場を求め行政関係者や医療従事者・消防関係者等が集まるセミナー・勉強会へ積極的に参加し、地域自治会や防災組織の方々を紹介していただくという地道な活動を行ってきた。その結果、現在では心肺蘇生講習会・応急手当講習会、学区の防災訓練、防災教育をはじめ京都マラソン学生救護サポーター実行委員会委員、各種イベント時の救護活動などの依頼を受け活動を行なうまでになってきた。その他、主に病院前救護に関わる人々が外傷に対する知識・技術を習得する講習会や大規模災害医療訓練等に参加している。

2012年度のおもな活動としては、地域での講習会指導9件、イベント救護活動11件、訓練参加8件、学外勉強会2件である。

地域での講習会指導は大学近隣の小学校学区での



地域での講習会



地域での講習会

防災訓練や自治会などからの依頼により一次救命処置の心肺蘇生法をはじめAED使用法の指導および止血方法や骨折時の処置の仕方をはじめ傷病者の方を安全に移動させるための搬送法などの応急処置法



の講習を実施した。

防災教育については、各学区内のハザードマップを2010年より年1学区のペースで山科区内の小学校学区の交通危険箇所やAED設置場所、災害時避難所などが一目で確認できる地図を作成している。現在までには大宅学区、勧修学区で本年度は小野学区を調査し年度末までに完成予定であり、各学区内の小学校と保育園幼稚園等の新入学児童新入園児等に配布予定でもある。また、防災教育では防災ダックといった園児など幼児を対象にした防災教育カードゲームを使用し、保護者の方が心肺蘇生法や応急手当法などの講習受講時間を利用して幼児が災害時のFirst Move（最初の第一歩）を安全に行なうために必要な知識を遊びながら実際に身体を動かし声を出して楽しく学べるように実施している。



防災ダック

イベント救護は地域での祭りや学区での催し物などやスポーツイベントなど多岐にわたり救護活動を実施している。今年度は京都市上下水道局の記念イベント救護依頼があり実施をした。これは今までの救護活動のように一定区間内を巡回や定点救護ではなく、ウォーキングラリーであったのでスタートかゴールまで10kmあまりを参加者と一緒に歩くといったものであった。

京都マラソンへの—TURF—としての関わりは、京都マラソン学生救護サポーター実行委員会（京都

府内医療系大学に在学する学生有志にて組織）に参加し、京都マラソン等で沿道救護を担当する学生へ心肺蘇生法とAED使用法を指導し、自らも救護活動に参加している。（京都マラソン2013では学生救護サポーターとして本学の看護学部、健康科学部の学生と共に—TURF—の学生をはじめ救急救命コースの学生が参加し学生救護サポーターの大半を本学学生が占めるまでになっている。）

訓練参加は病院前救護における外傷処置に関する講習会（JPTEC）や大規模災害時に活動するDMAT（災害急性期に活動できる機動性を持ち専門トレーニングを受けた災害派遣医療チーム）訓練の傷病者役として参加している。これらの訓練では病気や怪我等の病態生理を理解している者が実際の傷病者に近い状態を演じるによりリアルな状況で講習受講者や訓練参加者が傷病者管理を含めた処置を実施できることを目的にしているものであり、—TURF—の学生の評価は非常に高く、京都府内で実施される場合には必ず協力依頼をもらっている。

救急救命コースに所属する学生は救急救命士として消防・警察・病院等現場で活躍することを目標に日々学修に励んでいる中で—TURF—での活動により年齢の異なる人との交流やコミュニケーションの取り方など学ぶべき点が多くあり活動が臨床の知となっており、さらに一歩進んだ現場を体験する・ふれあう等の体験を通して一回り二回り成長し現場に出て行ってほしいと願うものであるが、他学部学科の学生諸君にも是非ともイベント救護や心肺蘇生・応急手当講習指導に参加してもらい心肺蘇生法などは特別な行為ではなく誰もが知っておくべき知識と技術なのだ和本学学生から普及できればと考える。

## 寺院とコミュニティとの“つながり”を考える

地域密着型アートイベント「おてらハブン!」を通して

郷原 彩子 Gohara, Ayako

本学大学院文化政策学研究科博士前期課程2回生

歴史的に見て、コミュニティの結束を強めるうえで重要な役割を果たしていたのは宗教です。欧米の多くの地域では現在でも教会がコミュニティの“場”となっており、そこで開かれる宗教的な活動がコミュニティの“関係”を生み出していました。しかし、現在の日本の宗教からはこうした役割がほとんど失われ、日本人にとって最も身近な宗教である仏教は“葬式仏教”と揶揄されるほどです。ところが、近年、寺院の活動に変化の兆しが見られます。中でも芸術文化を取り入れた活動は注目すべきものです。本稿では寺院とコミュニティとの“つながり”を検証するため、滋賀県にある日照山東光寺で開催されているアートイベントである「おてらハブン!」を取り上げます。これは県内外を拠点に活動するアーティスト集団 m-fat (モファ) が主催する地域密着型のアートイベントです。



毎年、「おてらハブン!」が行われる滋賀県日照山東光寺

「おてらハブン!」は、2008年から毎年5月の大型連休期間に開催され、2012年で5回目を迎えました。毎年15～20組のアーティストが参加し、地域の住民を含め毎年約400名の来場者があります。その開催の契機は、アーティストと東光寺の副住職である川本氏が、難解にとらえられやすい現代美術を生活の中に出現させることによって芸術文化を人々に身近に感じてもらい、日々の生活に楽しみと刺激を与えようと考えたからです。さらに川本氏は、副住職としてアートイベントを行なうことが寺院の継承につながるのではないかと期待を込めていました。川本氏は「お寺に来た子どもは“お寺で遊んだ”という記憶を持つことができ、将来、お寺を忌み嫌う場所とは思わなくなる。そうして、“お寺は面白いところだ”というイメージを次世代に継承することができる」と言います。つまり、「おてらハブン!」は寺院とコミュニティと芸術文化とをつなぐと同時に、寺院を次世代に継承させるための大規模な実験なのです。

第5回「おてらハブン!」のテーマは「タイムマシン製作所」。このテーマは m-fat が「去年の流れから、幸津川の歴史を掘り下げような展覧会がしたい」と考えたからです。開催期間中の開場時間は朝10時から夕方5時までで、入場は無料です。近所の子どもたちが多く参加し、4日間毎日、何らかのワークショップやパフォーマンスなどが行なわれ、4日目の最終日にはそれまで行ってきた表現活動を総合した内容の発表会を、子どもやアー

ティストなど来場者みんなで行ないます。「おてらハプン！」の作品は本堂や隣接する空き家で展示・表現され、これらの作品は4つのカテゴリに分けられます。第1はアーティストの「作品展示」で、展示された作品は絵画やアクリルペインティング、日本画、オブジェ、インスタレーション、草木染め絵、柿渋染めなど多岐にわたります。第2は、折り紙や段ボール、絵の具などさまざまな材料や道具を用い、作品の制作が体験できるといった内容のワークショップです。石に色を塗ったり、お菓子などのパッケージで作られた家の中で自分だけの紙袋を作ったりします。第3は「コミュニケーションアート」で、来場者がアーティストと一緒に作品を作り上げるというものです。アーティストとともに境内の下に秘密基地を作ったり、アーティストのパフォーマンスに飛び入り参加したりします。そして第4は「ライブパフォーマンス」で、アーティストが全身を使ってパフォーマンスやダンスなどの身体表現を行なうというものです。4つのカテゴリのうち「作品展示」以外は即興要素が強く、「1番に来て、1日だけでも、毎日来て楽しめる」ようにプログラムは構成されています。



コミュニケーションアートの1つ「音のパフォーマンス」の様子

「おてらハプン！」はプログラムも多種多様ですが、参加スタイルも多種多様であり、来場者は参加者ともなりうるし鑑賞者にもなりうるようなイベン



本堂にて、柿渋染めの展示とワークショップの1つ「新聞の巨大絨毯をつくってあそぶ」の様子

トです。そこでは大人から子どもまで幅広い年代の来場者に芸術文化がより身近なものと認識する機会を与え、特に子どもにとっては作品の作成過程をアーティストと共有することで対等な関係が生まれ、お互いの身体を通じた表現によって寛容性も高まります。そして、個人間の対等な関係から地域の人々との対等な関係が構築され、地域の人々が共感する部分とアーティストが意識する部分のずれによって、新たなコミュニケーションが誘発され、回数を重ねるごとに相互に程よい距離感が生まれます。「おてらハプン！」は寺院を軸にコミュニティの内部と外部とに横の“つながり”を生み出します。

さらに、コミュニティに長期間存在し、寺院やコミュニティの記憶を含んだ東光寺だからこそ、信頼という精神的な共同性を持つ寺院を開放された空間にすることができます。その記憶や信頼は、「おてらハプン！」によって子育てをする世代の比較的若い年代にも受け継がれており、コミュニティの世代間という縦の“つながり”を生み出しています。その子どもは「おてらハプン！」の参加によって、寺院の存在や寺院での身体に根ざした記憶を自身の日常に取り込み、次世代へ継承していくのです。

「おてらハプン！」は東光寺を中心に蓄積されてきた良質な文化と現代に生まれた文化の再生産に寄与することによって、寺院とコミュニティに新たな“つながり”を生み出しているのです。



## 京都モダニズム建築を訪ねて 第12回\*

\*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

# 比叡山回転展望閣

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授



写真1：キノコのような形状の展望閣。  
展望室の周りがガラスで覆われている。  
(写真：筆者撮影)

今回紹介する建物は「比叡山回転展望閣」(1959)である。もともとは比叡山頂遊園地の中に計画されたもので、鉄骨鉄筋コンクリート造の4層3階建て、延床面積は1315m<sup>2</sup>である。現在この建物はガーデンミュージアム比叡の展望台として活用されている(2013年は4月19日まで冬期休業中)。ロープウェイを利用して山頂に辿り着くと、降りてすぐにガーデンミュージアムのゲートがある。そこをくぐった向こう側に「比叡山回転展望閣」が建っている。外観はステンレス葺きの屋根が特徴的(写真1)で、比叡山の山頂に巨大なキノコが生えているように見える。キノコといってもちょっぴりずんぐりした形状で、どこかユーモラスな印象を受ける。足湯につかれるローズガーデンを超えて展望閣の近くまで行くと、1階はカフェとレストランになっていることが分かる(写真2)。この建物は展望閣と別棟になっており、その全体は横長で2層の直方体となっている。この低層棟の脇を抜けて展望閣に入るのだが、展望閣の

内部には螺旋状の階段があり、2階と3階から外部を見渡すことができる。今では老朽化したため回転していないが、竣工時は名前の通り最上階の床がゆっくりと回転し、じっとしたまま琵琶湖や周囲の景色をぐるっと1周



写真2：ロープウェイ側から建物を見る。(写真：筆者撮影)





写真3：最上階の展望室からは周囲の景色が一望できる。  
(写真：筆者撮影)

して眺めることができた(写真3)。そのため、2・3階の外壁は全てガラスで覆われている。この「比叡山回転展望閣」の他にも、1930～50年代にかけて全国に回転展望台が建てられ、今でも札幌のセンチュリーロイヤルホテルの回転レストラン、東京會館・銀座スカイラウンジ、神戸市・須磨浦山上の回転展望台や山口県下関市の「火の山回転展望台」等が残っているようである<sup>1</sup>。

設計者は戦前から戦後にかけて関西を代表する建築家であった村野藤吾(1891～1984)である。村野は非常に多作な建築家であり、代表作には「宇部市渡辺翁記念会館」(1937)、「世界平和記念聖堂」(1954)、「大阪新歌舞伎座」(1958)、「日本生命日比谷ビル(日生劇場)」(1963)などがあり、京都には、本学の謝恩会が例年開かれている「都ホテル(現：ウェスティン都ホテル京都)」(1936～1988)、京都駅の八条口に面して建つ「新・都ホテル」(1975)、「京都宝ヶ池プリンスホテル(現：グランドプリンスホテル京都)」(1986)等宿泊施設が多く残っている。展望閣と同時期の建物には「都ホテル 佳水園」(1959)や「宝塚ゴルフ倶楽部」(1959)等がある。

村野の作風は幅広く、一言では言い表わせない。この連載記事でも何度か村野の作品を取り上げようかと考えたが、その特徴の掴みづらさから断念してきた。という

訳で、今回は村野の作風や設計上の特徴について書いてみたい。私が大学生だった頃、長谷川堯先生の近代建築史という授業の中で村野の名前が出てきた。上記の「大阪新歌舞伎座」についての話だったのだが、当時モダニストだった長谷川先生はこの建物のファサード(正面)いっぱいに取り付けられた唐破風を受け入れることができなかった、とおっしゃっていた。合理主義の精神からすればほとんど装飾である唐破風が壁面一杯に所狭しと並んでいる様は、今見ても奇妙である。当時長谷川先生がこの建物を見て怒りを覚えた(確かそのようなニュアンスで講義された)のは当然だったと思う。しかし、先生は続けて、今ではもうそうではない、とおっしゃったように記憶している。先生の建築に対するスタンスが変わったことと村野建築に対する理解が深まったことがその原因だったように思われる。つまり、大阪・御堂筋の賑わいに対して、何の装飾もなくストイックで無表情なモダニズム建築は相応しくないというのが村野の出した答えであり、長谷川先生の理解であったのであろうと想像できる。建築のデザインを考える上で、仮に一方を装飾のないモダンなもの、もう一方を和風や洋風の歴史的なものとした場合、村野の建築デザインはそれらの中間か、もしくはそういったスタイルや様式を凌駕したものであったのだろう。実際、村野は有名な「様式の上にあれ」という文章を大学卒業の翌年(1919)に書いている。モダニズム建築の持つ純粋で抽象的な美しさは、明快で世界中の多くの人に理解され易いものである。その反面、地域や伝統の持つ独自の美しさを受け入れない場合が多い。しかし、環境問題や伝統文化の保存を考えると、モダニズム一辺倒では建築は生き残れないということ、村野藤吾は若くして気付いていたと言えるだろう。普段、知らず知らずのうちに合理的な思考に慣れた頭では村野建築はなかなか理解しづらいのだが、そのよく分からない、有機的で不思議な印象を抱かせるデザインにこそ、21世紀の新しい建築をデザインするためのヒントが隠されているのではないかという気がする。

<sup>1</sup> ARCHITECTURAL MAP を参照 <http://www.archi-map.jp/>

## 企業の社会的責任の理論と実践

阪本 崇 Sakamoto, Takashi

本学現代ビジネス学部准教授

# BUSIN

# FORUM

2012年11月10日、キャンパスプラザ京都にて、京都橘大学現代ビジネスフォーラム「企業の社会的責任の理論と実践」が開催された。第一部の基調講演には、この分野の第一人者であられる早稲田大学商学部の谷本寛治教授を、第二部のシンポジウムには、谷本教授に加え、京都を中心に中小企業へのCSRの普及に取り組んでおられる京都CSR推進協会会長の明致親吾氏（株式会社オムロン元副社長）、NPOとのパートナーシップを中心に環境ガバナンスについて研究されている滋賀県琵琶湖環境科学研究センター主任研究員の宮永健太郎氏をお迎えした。

業となったのは、21世紀に入ってからのことである。Corporate Social Responsibilityの略称であるCSRという言葉も、ようやく市民権を得た感がある。その背景には、根強い行政への不信から、環境問題や文化振興といった従来なら公共政策の領域と考えられてきた分野においても企業がより大きな役割をはたすことへの期待があると考えることもできる。その一方で、CSRにかかわる企業の活動を単なる企業イメージの向上のための活動と批判的に捉える向きも少なくない。CSRという言葉が一般的になり、それに対する評価も多様になってきた現在だからこそ、今一度CSRについて考えなおす必要があるだろう。これが今回の現代ビジネスフォーラムでCSRをテーマとして取り上げた理由である。

谷本教授によれば、CSRが注目されるようになった根本的な理由は、社会における価値観の変化である。こうした変化は1970年代から20世紀型産業社会への反省という形で起こってきたが、1990年代にグローバル化が進展するとともに、地球環境問題や社会的排除といった形でそのネガティブな側面が顕在化するようになると、より明確なものとなってきた。具体的に述べれば、経済発展を中心に据え、環境・社会はその与件にすぎないと見なす価値観から、経済と環境・社会のバランスを重視する価値観へ、そしてさらに進んで、経済は環境・社会の中でこそ成り立つという価値観の変化である。「持続可能な発展」という概念に結実することになった、こうした価値観の変化を背景に、企業に期待される役割も変化するようになり、CSRに関する国際的な議論が広



講演の様子

「企業の社会的責任」という言葉が日本で用いられるようになったのは、公害問題が全国で多発した1970年代であるが、一般の人々にとっても馴染みのある言

がりはじめた。また、それと同時に、市場もCSRを評価し始めるようになった。経済的指標のみであった企業価値を評価する基準が社会・環境的指標を含むトータルなものとなったのである。

CSRの意味する内容もまた変化してきている。従来、CSRの内容とされてきたのは、優れたものづくりや雇用の創出・維持、あるいは社会的事業や社会貢献活動といった、企業のいわば本業に対する付加的ともいえる活動であった。現在、問われているのは、むしろ、そうした活動を行なうプロセス、より一般的に言えば企業経営のあり方そのものであり、経営活動のプロセスに社会的公正や倫理性、環境や人権などへの配慮を組み込むことがCSRとして求められているのである。



シンポジウムの様子

シンポジウムの中で宮永氏は、谷本教授が企業経営の視点からではなく、社会のあり方からCSRを論じたことの重要性を指摘されたが、宮永氏の報告もまた、CSRの目的が持続的な発展であることを確認するところから始められた。社会の発展の基盤となる自然資本、社会資本、人的資本、社会関係資本のガバナンスや質の向上が求められているが、それは経済とそれらとのバランスをとることで実現されるのではなく、それらを含め社会の構造を変えることによって実現されなければならない。そのため手段のひとつがCSRだというのである。その上で、滋賀グリーン購入ネットワークや叡山電鉄「エコモーション号」など、滋賀県での事例が紹介された。

しかし、このように広がりを見せているCSRではあるが、課題も当然残されている。たとえば、谷本教授は、CSR担当部署の実体が報告書を作成するだけにな

っていることがあるなど、CSRに関わる制度化が急速に進展する一方で、制度をつくるだけで終わっているケースがあることなどを指摘された上で、長期的なビジョンを明確にすることや、これまでの企業理念や企業文化と、今問われているCSRの調整などを課題として挙げられた。

とりわけ、後者の問題は中小企業において注目されるべき問題である。明致氏は、日本の企業の大半が中小企業であるにもかかわらず、CSRへの取り組みは未だ大企業が中心で、中小企業には十分に浸透してはいないと指摘している。中小企業が地域に密着した存在であり、地域社会が抱える諸課題を解決する上では大きな存在であることを考えれば、これは看過できない問題であろう。明致氏は中小企業がCSRに必ずしも積極的ではない理由として、中小企業の場合には、創業以来の家訓を継承しつつ経営していることが多く、外部から社会的責任を問われることには抵抗があることを挙げられた。しかし、それ以上に留意されるべきは、中小企業は、たとえCSRに取り組む意欲をもっていても、大企業の取り組みは規模の面で参考にならず、自社なりの方法を見つけることができないと感じているということである。このことから、明致氏は、中小企業のCSRを支援・促進する何らかの「しくみ」が必要であることを示し、2011年に設立された京都CSR推進協議会の取り組みを紹介された。

以上のように、3つの報告はそれぞれ刺激的なものであったが、印象的であったのは、3人の報告者が共通して、企業だけを問題にするのではなく、企業以外の主体との「つながり」を重要視されていたことである。谷本教授は、社会貢献活動においては関係自治体や消費者団体、NPOなどとのパートナーシップが必要であると指摘されたが、宮永氏はCSRにパートナーシップの視点を入れることが重要なのは「それぞれができることを取り組む」のではなく、「それぞれだけではできないことを取り組む」ことができるからであると述べられた。また、明致氏は、さまざまな関係先それ自体が企業にとって社会であり、CSRはそうした社会に対して企業が信頼を築く経営であると指摘された。

4時間と長丁場のフォーラムではあったが、その長さを感じさせないほど有意義なものであったことを最後に付け加えておきたい。



## このまちが好き！ その思いを育てるために 「町たんけん」から「山科かるた」へ、地域の宝物を見つける旅

ゲスト

朱 まり子 Shu, Mariko

NPO 法人山科醍醐こどものひろば 町たんけんチーム  
山科かるたプロジェクト代表

聞き手

杉山 泰 Sugiyama, Yasushi

本学現代ビジネス学部教授、  
地域政策・社会連携推進センター長



対談風景

みんなで見つけた「山科の宝物」を、  
この一箱につめこんで

杉山 「山科かるた」の箱を開けて、札をすべて取り出すと、底に山科の地図が入っていました。地図には、「あ」から「ん」まで、読み札の頭文字が配されていて、山科のどの辺を詠んだ句なのかがひとめでわかる仕掛けになっています。

箱にも子どもたちの絵がたくさん散りばめられていて、熱気のようなものが随所から伝わってきました。

朱 山科のかるたを作りたいという話は、最初は「山科醍醐こどものひろば」の活動のひとつである「ひろば文庫」から出てきたんです。それはいったん頓挫しましたが、わたしたちはずっと、子どもたちに「このまちが好き！」と思ってほしいと願っていたので、それがいろいろなところに表われているのかもしれない。

おとなになって、山科から離れても、「むかし住んでた山科って、ええとこやったなあ」と思ってほしい。ステキな器を手にしたとき、「そういえば子どものころ、清水焼団地でお茶碗、作らせてもろたなあ」と思い出してほしい。「郷土愛を育む」とか「地域のことを学習する」というような難しい話ではなく、素朴に「このまちが好き！」と思ってほしい。そんな思いがあったので、2002年から「山科醍醐こどものひろば」で「町たんけん」という活動を始めました。それが、今回のかるた制作の下敷きになっています。

杉山 そうすると、このかるたは、10年以上の取組の成果ともいえますね。「町たんけん」というのは、どんな活動ですか。

朱 清水焼、京仏具、京菓子など、区内の伝統産業の現場で実際に物づくりを体験したり、田畑で農作物を観察したり、山科川や安祥寺川、稲荷山などの自然環境にふ



朱 まり子

京都・山科本願寺「南殿跡」傍で生まれる。大学・大学院で児童文学・絵本・影絵・人形劇を学んだ後、京都 YMCA (宇治プランチ) でのボランティアの後、幼稚園での勤務を経て、「山科醍醐親と子の劇場」(現・NPO 法人山科醍醐こどものひろば) へ入会。数年後から広報・運営に関わり、理事長、つどいの広場の施設長を務める。同時に保育・幼児教育を目指す学生へ、大学・短大の非常勤講師として関わる。2012 年春、つどいのひろば施設長・非常勤講師を退職。現在、NPO 子育ての文化研究所代表、子ども・子育て支援コーディネーターとして活動中。

れたり、疏水や山科本願寺跡をはじめとした歴史・文化遺産を歩いたり、新幹線を見下ろすスポットに行ったり、ゴミ最終処分場を見学したり、とにかく山科中を歩き回りました。疏水の行き先をたどって、山科を飛び出し、鴨川まで行ったこともあります。

そこで発見したことを毎年、ガイドブックにまとめて、区内の小学生に配っていたのですが、各号ごとに「山科西部を歩く」「山科東部を歩く」というふうの特集を組むので、山科の姿をまるごと伝えるのはなかなか難しいですね。そこで、「山科のことを一度に伝えられるものがほしい」と、みんなで試行錯誤して、結局、たどり着いたのが「山科独自のかるたを、子どもたちに作ってもらおう」ということでした。

## 子どもの目、子どものことばを大切に

杉山 かるたの絵は、すべて子どもたちが描いたのですか。

朱 できるだけ子どもの作品を使いましたが、複数の子どもの絵を合成したものもありますし、おとなが作った絵や句もあります。

たとえば「山急で 京都駅まで 一直線」という読み札は、編集委員会では「山科から京都駅まで一直線ではないから、『一直線』は『まっしぐら』に変更しよう」と相談していたのですが、この句を応募してきた子は「バスに乗ったら、わかる。一直線や！」と言うので、もう一度、検討して、「そうやね。お母さんは『学校からまっすぐ帰るのよ』って言うもんね。やっぱり『一直線』を大事にしよう」という話になりました。

ただ、絵のほうは、バスの絵だけでは寂しいし、稲荷山トンネルを抜けることも表現したいので、別の子の作品をコンピューター上で合成して、伝わりやすくしています。

ちなみに、「山急」というのは、阪神高速道路京都線を利用した京阪バス路線「山科急行線」のことで、地元の人たちは親しみをこめて「やまきゅう」と呼んでいます。杉山 「蓮如の像 戦争に行つて とけちゃった」という句は、感心しました。歴史を知らないと、なかなか出てこない句だと思います。

朱 蓮如上人立像は、第二次大戦で供出されて、いまは台座しか残っていません。この句は、「町たんけん」でその場を訪れたときに、そうした経緯を子どもたちに説明して、すぐに書いてもらったうちの最高作です。

## 子どもの「行きたい！見たい！やってみたい！」を大切に

杉山 「町たんけん」に参加した子どもたちの作品だけでなく、一般の小学生から寄せられた絵や句もあるんですね。

朱 このかるた制作で連携した東山ロータリークラブさんが、資金面の援助だけでなく、「この取組を区内のすべての子どもに知らせて、どの子も参加できるようにしてほしい」と、本当に熱い気持ちで後押ししてくださったおかげで、応募用ハガキ付きのパンフレットを区内の全小学校で配ることができました。その結果、13校203人の子どもたちが応募してくれたんです。

作品を募るときに大切にしたのは、子どもたちが、学校や先生の指示ではなく、自分の意思で応募できるように、ということでしたので、学校ごとに取りまとめたいただく方式は採らず、応募用ハガキを料金受取人払いにして、子ども自身がポストに入れられるようにしました。

そうすると、意外なことに、警察署や図書館といった、どのまちにもある公共施設を詠んだ句がけっこうたくさん集まってきたんですね。

たとえば「みんなを 守るよ 山科けいさつ」という作品は、小学校1年生の子が送ってくれたのですが、その絵の裏に、お母さんの字で「うちの子は、警察の方が本当に好きで、毎朝、会いに行くのを楽しみにしています」というようなことが書かれていて、とてもステキだと思いました。

杉山 「元気出た 本は友だち 山科図書館」という句も、いいですね。

朱 おとなは「図書館なんて、どこにでもある」と思いがちですが、子どもはとても大切に思っている。これは、おとなにとっても新鮮な発見でしたし、それを採用しないわけにはいかないと思いました。子どもたちが、みずからの目や感性で見つけた「山科の宝物」ですから。

杉山 つまり、子どもの目線が、おとなの思惑や想定を超えて、地域の宝物をとらえていった。

朱 まさにそうですね。そこをできるだけ活かそうと、一句ずつ、何度も検討を重ねて、吟味しながら作りました。

「町たんけん」も、あらかじめ計画は組みますが、子どもの「行きたい!見たい!やってみたい!」という気持ちを大切にしたいので、彼らが「行きたくない」とか「きょうは暑いから、ここで終わろう」と言えば、「じゃ、そうしようか。いままでのことは大事にしといてね」と言って、終わります。内心、「ああ、もったいない!」と思いますが、そこはグッとがまんして(笑)。

## 「マイかるた」を作ってほしい

### —白札に託した願い

杉山 お年寄りの間でも「山科かるた」が人気だそうですね。

朱 ええ、たとえば「随心院 はねず踊りは 三月に」という句が読み上げられると、勢いよく「ハイッ!」と絵札を取った後、「そういえば、随心院の横にあるそば屋なあ…」「うちも、あのおそば屋さん、行ったわ」というふうに、延々と話が續くんですって(笑)。

「山科かるた」は、お年寄りが来られる施設にかなりたくさん寄贈させていただきましたけれど、もっと使っていただけるようにしたいですね。

杉山 何も書かれていない白札が、読み札と絵札の最後にそれぞれ5枚ずつ入っていました。これは?

朱 ご自分で、どこにもないオリジナルのかるたを作っ

ていただくための札です。「うちのお父さん とっても怖い」とか「うちの隣のお地蔵さん 赤い前掛け よく似合う」というふうに、自分の家や近所のことをかるたにしてほしい。受け身ではなく、ご自身でかるたを作っていたら、というのがわたしたちの願いです。

杉山 それはとてもユニークですね。自分の目で周囲を見つめて、自分の頭で考えることが大事ですし、そこから第二、第三の「山科かるた」ができれば、おもしろいと思います。

朱 山科図書館の館長さんは、群馬県のご出身で、群馬の「上毛かるた」は、第二次大戦後の占領政策のもと、学校で地理や歴史を教えることが禁止された時代に生まれたということを教えてくださいました。県外で同郷の方同士が知り合ったときも、「上毛かるた、した?」と聞くだけで、一気に話が盛り上がるそうです。それで館長さんは、「山科かるた」も「上毛かるた」のような存在になってほしいということで、「山科かるた」であそぶ企画を続けてくださっています。

杉山 そういふ思いが集まって、やがて「山科かるた」が区民の共通の思い出になれば、それは個人にとってもすばらしい財産になると思います。かるたは、どこで入手できますか。

朱 「山科醍醐こどものひろば」の各施設はもちろんのこと、商店街のいくつかのお店や山科区社会福祉協議会等でもお買い求めいただくことができます。1個1000円です。この値段では販売手数料をお支払いすることはできないのですが、どのお店の方も、「子どもが買える



山科かるた



単価にしないと意味がない。地域のために、マージンなしで売りましょう」と言い切ってくださいました。本当にありがたいことです。

## つながること、誰かの役に立つこと、それがエネルギー源

**杉山** 朱さんの話をうかがっていると、とくに文化を大切にしたいというお気持ちを強く感じます。

**朱** わたしの父も祖父も史蹟が大好きで、その愛好ぶりはマニアと言えるほどでしたので、わたしも小さなころから古いもの、貴重なものをたくさん見てきました。「門前の小僧、習わぬ経を読む」ということわざがありますが、わたしも、石造物を見たら、それが古いものか、希少価値のあるものか、ということがある程度はわかるような子どもだったんです。

それから、山科に生まれ育って、山科本願寺南殿跡にある南殿保育園（現・南殿幼稚園）に通ったことも大きかったと思います。この活動で山科本願寺の復元図を見て、こんなすごい所で育ったのだと感激しています。そういう環境で育ちましたので、山科にはいいものがたくさんあることを知っていましたし、それを何とかして伝えられたらという思いはずっとありました。

それに、「山科醍醐こどものひろば」も、「文化は一部のゆとりのある層だけのものではない。誰でも文化を享受できるように」ということが基本的なコンセプトで、創作劇、サマーキャンプ、演劇鑑賞、生活困窮家庭の子どもへの生活・学習支援から、赤ちゃんと一緒に楽しむお茶会まで、いろいろな取組をしているんですよ。

**杉山** 文化という意味では、本学も、この10年間、山科の文化資源の掘り起こしに向けて、地域のみなさんと連携して、さまざま取組をしてきました。そのなかから「やましな駅前陶灯路」などのイベントも生まれ、それなりに地域に根づいてきたのではないかと考えています。また、こうした連携は、学生への教育効果という点でも大きなものがありました。

**朱** 京都橘大学には本当にお世話になっていますが、とくに最初にいい出会いをさせていただいたと思います。「町たんけん」を始める前の資料収集の段階から相談に乗っていただきましたし、「山科文化開発プロジェクト」の研究会で、区内の産業界や商工会など、いろいろな

方々と知り合えたことは、「山科かるた」を制作するうえでも大きな力になりました。

というのは、「町たんけん」のガイドブックは、この10年間の累計で約4万部を発行してきましたが、これには年齢も立場も異なるいろいろな方が参加して下さったんです。多くの人とつながっていなければ、このプロジェクトはできなかったと思います。

**杉山** やはり、何をやるにも「つながり」は大事ですね。**朱** 本当に。そういう幸せな出会いがたくさんありました。小学校の先生方も、ガイドブックが子どもたちに役立つもの、子どもたちの喜ぶものだとわかってくて下さいますし、京都府立総合資料館はガイドブックのバックナンバーを、厚紙で補強して、閲覧室に置いて下さっているんです。素人が作ったものなのですのに。

**杉山** それにしても、「町たんけん」から「山科かるた」に至るまで、朱さんは本当に粘り強い。そのエネルギー源は何ですか。

**朱** わたし独りでやっているのではありませんから（笑）。かるたの版下作りは、仕事を持っているお母さんが一所懸命やってくれましたし、「町たんけん」のスタッフも、働いている人が多いので、平日、有給休暇を取って参加してくれたりします。みんなの熱意と奮闘があるから、わたしもやってこれただけです。

それと、自分たちの作ったものが、いまま残って、誰かに使われ、役に立っている、というのも励みになりますね。ガイドブックの1冊目は、たった800部しか刷らなかったのに、それがコピーされて、中学生の研究発表で使われたのだそうです。この話を聞いたとき、「印刷物にして残すことで、誰かの役に立つことがあるのだ」と思いました。

それに、何といっても、みなさんが「いいね!」「見たよ。よかったね!」と褒めてくださるから、頑張ることができる。まるで、子どもが褒められて育つと同じですね（笑）。今年の夏には、「山科かるた」の一句ずつに解説を付けた冊子を発行したいと思っていますので、今後ともよろしく願います。

（了）

## “Think Globally! Act Locally!”を 実践して生まれた「山科かるた」

京都橘学園創立110周年目にあたる2012年の4月に新たな情報発信基地として「地域政策・社会連携推進センター」が発足した。そのセンター広報誌『つながる』第2号に朱まり子さんに登場していただいた。朱さんは30年以上もこの山科で子どもたちに地域の「宝物」を知ってもらおうと、「町たんけん」をはじめとする活動を続けてきて、この10年間で4万部もの「ガイドブック」を発行してきた。山科すべての小学校に配布し、子どもたちは自分たちが住んでいる山科の歴史を学び、ふるさとに「宝物」が眠っていたことに気づいていく。

「山科醍醐こどものひろば」というNPO法人を立ち上げ、2002年から始めた「町たんけん」の活動が、実は、今回のインタビューで話題となった「山科かるた」作りへとつながっていったことが手に取るように分かった。

春來たら さくらなのはな 山科疏水

ゆうなぎの 水はぼこぼこつと わきだすよ

といった句も、その場所に行ったことのある子どもには絵となって生き生きと浮かび上がってくる。

また、

涼をとる 色とりどりの 京扇子

ぬりこんだ 山科砥の粉で つ〜るつる

車石 牛と運んだ 荷車の道

ろくろはね いろいろ作れる 魔法のいずみ

などは、山科の歴史を少し学ばないと「よそさん」には

今一つ分かりづらい。

さらに、子どもだからこそ、素直に作れる句も数多い。

みんなを 守るよ 山科けいさつ

山急で 京都駅まで 一直線

元気出た 本は友だち 山科図書館

この「山科かるた」で正月を家族と一緒に遊んでいる姿を見るだけで、大学教授が授業で教えてきた「文化によるまちおこし」「都市環境をいかにデザインし直すか」「Think Globally! Act Locally!」といった理念がしっかりと大地に根を下ろしていることに気づく。

「山科かるた」は京都オムロン地域協力基金を得て、「京都ヒューマン賞」を受けているし、博報財団からも「博報賞」を受けている。さらには、京都市から「実践推進者表彰」まで受け、山科から根を張ってきた「NPO法人山科醍醐こどものひろば」の活動も朱さんよりももう少し若い多くの人々がかかわるようになってきている。

こうした活動が継続できたことは、「山科に京都橘大学があってこそ、2002年に大学の複数の研究室を訪れ、さまざまな先生方のアドバイスを聞きながら、補助金の獲得にも力を入れてきました」と朱さんは言ってくれました。わが大学の「文化によるまちおこし」という新しい学問が少しずつ山科でも定着してきたなと実感できたインタビューでもあった。(杉山 泰)

つながる Vol. 2 (2013年3月20日)

発行：京都橘大学 地域政策・社会連携推進センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Telephone: 075-574-4186 Facsimile: 075-574-4149

http://www.tachibana-u.ac.jp E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp



京都橘大学

地域政策・社会連携推進センター

Center for Regional Policy and the Promotion of External Relations  
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY